

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業・国際交流拠点形成事業)

事業名： みんなで展覧会に参加しようー芭蕉とともにつくる

事業者名：財団法人柿衛文庫

住所： 兵庫県伊丹市宮ノ前2-5-20

TEL：072-782-0244

FAX：072-781-9090

HPアドレス：http://www.kakimori.jp

連携事業者名：大阪芸術大学短期大学部

兵庫県人と自然の博物館

伊丹市立小学校3校、伊丹市立中学校1校

会場：財団法人柿衛文庫

事業期間：平成21年6月25日～平成21年12月15日



1. 館の使命と本事業の関係

連歌から現代の俳句まで、400年におよぶ我が国固有の短詩型文学である俳文学資料の収集・保存・調査研究・活用を使命とする当館は、展覧会や各種講座、俳句大会や市内の小・中学校での「ことば科」特区への協力など、多岐にわたる事業を展開してきたが、このたびの芸術系および自然系分野との連携による事業拡大は、当文庫の活動の深まりと、当文庫への親近感をもたらし、「ことば文化都市」を標榜する伊丹市の中核施設としての役割がますます増すものと期待される。

2. 企画内容

①事業目的

当文庫の代表的な所蔵資料である芭蕉直筆を素材として用いることで

- ・ 古典をより身近なものとする。
- ・ ワークショップの作品を当文庫の秋季特別展「芭蕉一新しみは俳諧の花」にあわせて展示し、当文庫の展覧会への親しみを深める。
- ・ 従前は交流のない芸術大学や自然史系の館と連携することで、ともに今後の活動の拡大を図る。

②事業概要

小・中学生および市民家族を対象とし、芭蕉直筆の「古池や蛙とびこむ水のおと」句短冊を題材に、「造形」と「書」の二分野において制作を行う。作品は、当文庫の特別展と同期間、制作過程をしめすパネルやDVDとともにロビーに展示する。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

・書の分野（小学生対象）

- ① 伊丹市の小学校における過去三年間の「ことば科特区」の取組みを踏まえて、「兵庫県立人と自然の博物館」研究員により、生きた蛙やおたまじゃくしに実際に触れながら、蛙の生態のレクチュアをうける。
- ② ことば科の外部講師をつとめる俳人の木割大雄氏の指導のもと、短冊に「古池や」の句を全く自由な表現方法で書く。

7月7日 1・2時間目 伊丹市立稲野小学校6年生 1クラス

3・4時間目 伊丹市立稲野小学校6年生 2クラス

5・6時間目 伊丹市立鈴原小学校6年生 2クラス

7月9日 1・2時間目 伊丹市立花里小学校4年生 3クラス

・造形の分野（中学生および市民家族対象）

- ①「兵庫県立人と自然の博物館」職員による、芭蕉の当該句が誕生した『蛙合』^{かわずあわせ}を題材にした新作講談を聴く。

- ②大阪芸術大学短期大学部の堀野利久准教授の指導のもと、参加者が各自の蛙を粘土で制作し、クラス、家族単位で皿に盛って焼成する。

7月15日 伊丹市立東中学校1年1組

8月12日 家族15組

9月11日～14日 作品素焼

9月18日 施釉

9月19日～24日 本焼

・展示

10月3日～11月23日



(2) 参加者の数

参加者人数 延べ 4, 407 人

内 訳： 小学生 256 人 中学生 1 クラス 35 人 家族 15 組 43 人

秋季特別展「芭蕉一新しみは俳諧の花」 総入館者数 4,073 人

(3) 事業により作成した印刷物等

ちらし みんなで展覧会に参加しました 83, 500 部

報告書 みんなで展覧会に参加しようー芭蕉とともにつくる 500 部

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

秋季特別展「芭蕉一新しみは俳諧の花」がユニークな展覧会としてとらえられたため、日刊各紙が社会面や文化面に掲載、俳句関係の雑誌や個人のブログ等でも紹介されたが、残念ながらワークショップそのものが大きく掲載されることはなかった。わずかに、毎日新聞の 2009 年の 10 月 4 日付の阪神版朝刊記事「芭蕉と現代作家コラボ」のなかに「子どもたちの短冊も展示」という小見出しとともに記事文の三分の一程度をさいて紹介されている。

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

参加者にとって芭蕉の「古池や」の作品が身近に感じられ、同時に当文庫の事業へ親近感を持ってもらうことができた。

書の分野では、生きた蛙に触れることで、命の鼓動を感じ、芭蕉の気持を考えながら、短冊という、おそらく初めて接するであろう空間に自由に表現させたため、意外な発想や表現の作品ができた。小学生達の「（芭蕉の）俳句の風景を想像して、絵をかくのが楽しかったです。またやりたいです」という感想や「かえるをねさわれるようになったんだ」や「かえるさんおもいでひとつありがとう」という句に今回のワークショップの成果が示されているといえる。それはまた、積み重ねられてきた「ことば科」特区の試みの成果であるともいえる。

造形の分野では、それぞれの蛙をクラスや家庭を表す大皿に盛り込むことで、各自の個性が反映された作品の集合体が、はからずもクラスや家族の表情を浮かび上がらせることになった。また制作の過程では、クラス単位で、そして家族単位で、力を合わせて一つの作品を完成させる喜びを味わってくれたようである。

さらに、ワークショップの作品制作の参加者だけでなく、実施する側の協力者、たとえば芸術大学の学生たちや、人と自然の博物館関係者から、

「同じ粘土や方法で制作した蛙がそれぞれ個性を持ち、世界に二つとない蛙になったことに感心した」（制作補助学生スタッフ）

「中学生も家族も心から楽しみ、笑顔の絶えないすばらしい時間だった」

（映像記録担当学生スタッフ）

「さすが、小学校時代からことば科で五感を鍛えられている中学生だけあって、おそらく今まで触れたことのない講談というものをしっかり聴く耳をもち、その中で自分の蛙のイメージを多様に膨らませているようだ」（講談担当スタッフ）

等の感想が寄せられた。

今後の課題としては、今回はいずれも時間や材料が限られ、多くの参加希望に答えられなかったことが残念であった。さらに今回の取り組みを、今後どのような形で展開していくのが、大きな課題であるが、短いことばで表現された句を読み手の側として絵で表していく美術系の展開、句の題材としての自然と人のかかわりなどを考える自然史系の取り組みなど、今まで協力関係の乏しかった分野との交流から新しい試みを見出していきたい。